

富山教区 婦負西組 勝福寺 藤島 秀恵

先日、一歳八ヵ月になる息子が朝の四時半ごろに目を覚まし、妻を起こしていました。まだ眠たいから「もう起きたの？もうちょっと寝ていいよ」と。そんなことはお構いなしに息子は「起きろ、起きろ」と言わんばかりに母親をゆすっています。すると「お父さんと遊んでもらって」と。寝たふりをして様子をうかがっていた私はドキッとしました。結局、両親とも根負けし息子に起こされました。「はぁ眠い」そんな目覚めです。

今話を聞かれて、皆さんはどんな感想がありますか？

分かる！分かる！そんな時もあるよね。ほのぼのとして良い朝だね。

もっと奥さんに協力してあげないと。小さい子供がいたら当然だよ！などなど、いろいろなご意見があると思います。

寝る時間が遅かった私には辛い朝でした。とても器の小さい話ですが、正直な感情です。今振り返ってみると何となく恥ずかしく思います。小さなわが子が目を覚まし、親にお腹がすいたことを一生懸命表現しているのに、その時、私の心は息子の訴えより自分の「眠たい」を優先していました。とても小さなことですが優先順位は自分でした。

最近、「徒然草」という書物に出会いました。鎌倉時代末期に兼好法師によって書かれた随筆です。その時代の社会・人間や時間・無常観、恋愛観など多岐にわたる内容が書かれています。

その第百三十四段に「賢そうにみえる人も、他人のことばかりいろいろと推測をするけれども、自分のことは知らないものだ。自分自身を知らずに他人のことなどを知るという道理はない。だから、自分を知るものを、物の道理を知る人と言うべきである。」とあります。

兼好法師はこの段の最後に「まったく、人に愛されていないというのに、人と交わろうとするのは恥である。容姿が醜いということで気後れしながら仕事をして、無知であるのに偉大な人たちの中に交じり、未熟なのにしたり顔をして、白髪頭で年老いているのに若い人の中に交じり、できもしないことを望んで、叶わないことが分かっている事に悩み、来るはずもない人を待ち、人を恐れて人に媚びている。これは、他人が与える恥ではなくて、自分の貪欲さに引き寄せられて、自分で自分を辱めているのである。貪欲の心が収まらないのは、命が終わる瞬間が、今ここに迫っているという実感が無いからである。」と結んでいます。

この段のポイント3つあります。

1つ目は「自分を知るものを、物の道理を知る人と言うべきである」

2つ目は「すべての価値判断は自分自身がして、その判断が自らの身を辱しめるのである」3つ目は「自分のいのちに限りがあ、いつどうなるかわからないことも、現実として受け止めていないのである」

ポイントの1つ目と2つ目より考えると

先日の私は、遅くまで仕事をして眠い、寝ることは当然で、もっと気遣ってほしい。だから、子どもは妻にみてほしい。自分は正しい。とっていました。そして、妻に「お父さんなんだから、もっと協力してよ」と言われ腹が立ちました。その時の私は父親として、夫として、子どものことを母親任せにし、妻への思いやりがなく、わが子を後回しにしている自分の姿なんて見えるはずがあ

りません。つまり、自分自身が見えず、自分中心の判断により自分と家族の中に不和を起こしたのです。しかし、後日、自らを振り返ってみると、もっと子どものことを考えてあげた方が良かったな、妻の方が子育てをやっているから、気遣いがあれば良かったな。腹を立てることもなかったなと反省しました。

皆さんはどうか？今までの人生を考えると「何であんなことを思ってしまったのだろう」「もっと優しい言葉をかけられなかったらどうか」「どうしてあんなことをやってしまったのだろう」という、心・言葉・行動がなかったでしょうか？少なからずあるのではないのでしょうか？

人間は身体や心の状態が良いと、思いやりのある判断ができるかもしれないが、その場その場で体調や感情などによってコロコロと判断を変えてしまうのです。何とも不正確なものです。

ポイントの3つ目より考えると日常というか普段というか、日々が当たり前になっています。生き物は必ず死を迎えます。この事実疑問を持つ人はいないでしょう。しかし、その事実を現実として受け止めていないため「生きる」ことが、ぼやけています。生と死は表裏一体であり、他人事ではないのです。

仏教では欲望や怒りや邪なもの考えなどを煩惱と言います。その煩惱を抱えた存在を、親鸞聖人は煩惱具足の凡夫と記されています。自分中心であり、不正確な存在、不完全な存在が「私」だと。その私が、限りある命と知らされ、当たり前ではない命に出会うことで、周りの命の有難さ、希有さを感じられるのではないのでしょうか？

私自身で考えると小さな日常も本当は当たり前ではないのです。私の命が今あることへの不思議に出会い、そこから妻や息子、両親、兄弟、友人、その他有縁無縁の人々の存在の有難さ、尊さに出遇えるのでしょうか。

自らの不完全である現実や無常な命という事実を知らされ、どう生きるべきかと「問い」を持つ重要性を説くのが仏教です。つまり、仏教を通して自分自身を見つめるのです。それにより、少なからず生き方が変わってくるはずです。

解説

○『徒然草』（つれづれぐさ）

鎌倉時代末期に兼好法師が書いたとされる随筆。清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』と合わせて日本三大随筆の一つと評価されている。

「つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」という印象的な短い書き出しの序段に始まっている。全体的内容は多彩で、自然や恋愛や政治や社会のことなど、様々な事柄が、簡潔で分かりやすい文章で書かれています。

兼好の経歴はあまり詳しいことはわかっていないが、神官の子として生まれ、二十代の前半には六位の蔵人として、後二条天皇に仕えました。三十歳以前にはすでに出家し、少なくとも七十歳過ぎ生きただようです。

僧侶として仏教の視点で記されている点が多く見られます。

○浄土真宗のみ教えに出会うとは、また、み教えに生きるとは

以下に親鸞聖人滅後、主に関東の門弟の間で故聖人の口伝の真信に背く異義が生じたことを歎き、聖人面授の門弟である著書(おそらく唯円房)が同心の行者の不審を除くために著したものである『歎異抄』を引用し、考えてみます。

『歎異抄』第三条 浄土真宗聖典(註釈版) 八三三頁～

善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいく、「悪人なほ往生す。いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。

『浄土真宗聖典 歎異抄 現代語版』

善人でさえ浄土に往生することができるのです。まして悪人はいうまでもありません。ところが世間の人には普通、「悪人でさえ往生するのだから、まして善人はいうまでもない」といいます。これは一応もつともなようですが、本願他力の救いのおこころに反しています。なぜなら、自力で修めた善によって往生しようとする人は、ひとすじに本願のはたらきを信じる心が欠けているから、阿弥陀仏の本願にかなっていないのです。しかしそのような人でも、自力にとらわれた心をあらためて、本願のはたらきにおまかせするなら、眞実の浄土に往生することができるのです。

あらゆる煩惱を身にそなえているわたしどもは、どのような修行によっても迷いの世界をのがれることはできません。阿弥陀仏は、それをあわれに思われて本願をおこされたのであり、そのおこころはわたしどものような悪人を救いとして仏にするためなのです。ですから、この本願のはたらきにおまかせする悪人こそ、まさに浄土に往生させていただく因を持つものなのです。それで、善人でさえも往生するのだから、まして悪人はいうまでもないと、聖人は仰せになりました。

○一般的な悪人と善人と仏教よりの悪人と善人

一般的には人間的や社会的に、悪を行うものを悪人、善を行うものを善人と言っています。浄土真宗では阿弥陀さまの智慧(さとり)の眼からみられた私は煩惱具足の凡夫(自ら悟ることが出来ない)と知らされ、私がまさに悪人であると自覚したものを悪人と言ひ、自らをあて頼りとして正しい

行いができると阿弥陀さま（他力）をあてにしないものを善人と言います。

○仏教よりの善人・悪人

善人ばかりだと争いは絶えない、それは、自分が正しいと考えている人同士では、相手を受け入れることが出来ないのです。人間関係においてケンカが起こるのは善人同士です。悪人の自覚により、自分が不完全である（煩惱具足の凡夫）といただき他を一方向的に責めることが出来なくなります。

また、善人は、真実の眼を持たないことの自覚がないから、真実である阿弥陀さまの智慧より自らを問うことを放棄しています。

み教えに出会い、生きるとは、死ぬまで不完全である私に向き合いながらも、阿弥陀さまの「どう生きるべきか」という「問い」に耳を傾け続けようとする生き方です。

完全な人間には成れないながら、悟りへ向かう人生だから、人間的、社会的な悪をただ垂れ流すのではなく、少しでも減らそうと努める生き方に変わることです。

他人を責めることはできない自分がいます。仏教より自らを見つめ直してみましよう。

行いができると阿弥陀さま（他力）をあてにしないものを善人と言います。

○仏教よりの善人・悪人

善人ばかりだと争いは絶えない、それは、自分が正しいと考えている人同士では、相手を受け入れることが出来ないのです。人間関係においてケンカが起こるのは善人同士です。悪人の自覚により、自分が不完全である（煩惱具足の凡夫）といただき他を一方向的に責めることが出来なくなります。

また、善人は、真実の眼を持たないことの自覚がないから、真実である阿弥陀さまの智慧より自らを問うことを放棄しています。

み教えに出会い、生きるとは、死ぬまで不完全である私に向き合いながらも、阿弥陀さまの「どう生きるべきか」という「問い」に耳を傾け続けようとする生き方です。

完全な人間には成れないながら、悟りへ向かう人生だから、人間的、社会的な悪をただ垂れ流すのではなく、少しでも減らそうと努める生き方に変わることです。

他人を責めることはできない自分がいます。仏教より自らを見つめ直してみましょう。